広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要 XXI 2009. 3. 22

19世紀後期の米国における幼稚園音楽教育の発展

－1880年代の幼稚園用の歌の本を手がかりとして－

武 内 裕 明
（本講座大学院博士課程後期在学）

はじめに

米国の音楽教育の歴史上、初等学校以後の音楽教育は、「学校音楽」の歴史として統合的に理解が進められてきた。米国では学校音楽という包括的な枠組みで音楽教育が把握されてきたことは、荒巻（2001）も指摘したとおりである[1]。しかし、このような把握は学校という枠組みを前提としたものであり、そのため音楽教育の転換点や連続性の断絶を把握するには不向きなものであろう。従来の教育からは異質な存在の登場の背景は、学校という枠組みを自明視したままでは捉え難い場合もあるのである。たとえば、19世紀末の読譜重視の時代から20世紀への世紀転換期にかけての変化、すなわち暗唱歌や歌唱を音楽教育で活用するようになったという変化は、初等学校の教科書の変化と、その思想の変化として叙述される。その原因は、言語教育の新しい指導法の読譜指導への適応として語られるのである。読譜指導は、読みの指導と同様に、学校教育的な問題として理解されている。このような理解をすれば、なぜ暗唱歌が取り入れられるようになったのか、という問いは閉じられてしまう。

音楽教育は、ある時代の多様な音楽への要求の現れの一側面である。すなわち、たとえば蓄音器の普及、オーケストラやオペラの増大に伴うコンサートの聴衆の開拓、集会で愛唱歌を歌うというニーズに応えること、といった個別的な要求による所与の教育に対する挑戦の結果として、音楽教育は成立してきたのである。このように、異なる枠組みからの挑戦という視点を導入することで、音楽教育の歴史、及び現在の方向性は再考される必要があろう。

音楽教育をそのような存在としてみるならば、その現在の形を形成するに至った背景の1つとして幼児教育における音楽教育を挙げることができるであろう。とりわけ20世紀初期の音楽科の活動内容の拡大に際して、幼稚園側の活動が取り入れられた痕跡が認められるのである。現在の日本においては、幼児教育と初等教育の不連続はしばしば指摘されている。現在の幼児教育のモデルとして幼稚園が占めた位置が大きいことを鑑みれば、米国においても幼稚園と初等学校の間に断絶が存在したと考えられる。しかし、進歩主義教育の受容される時代には、その断絶がその子ども中心という共通項において認識されることを免れていたかもしれない、と考えることは不当ではないであろう。ところが、学校音楽教育と影響関係があった可能性が高いにも関わらず、幼児の音楽教育に関しては学校音楽という枠組みからはほとんど等閑視されているのである。Birge（1961）やKeene（1982）では、言及自体が少なく、Tellstrom（1971）もフレーベルの理念に関する言及が中心である。MarkとGray（2007）はもっとも詳細に幼稚園を扱っているが、哲学的側面が中心で具体的な分析は不十分であり、幼稚園用の歌の本に関する言及は、後に引用するVandewalker（1908）に依拠し[2]、それを掘り下げたものではない。これは、音楽教育史家たちが伝統的に幼児の音楽教育を見落としてきたというよりも、むしろ彼らの主要な射程には、手がかりがほとんど存在しないことに由来するであろう。当時の音楽教育の状況を確認するために雑誌*School Music*や*Music Supervisors' Journal*、Music Teachers' National AssociationやMusic Supervisors' National Conferenceの*Proceedings*などを追ったとしても、幼稚園に関する記述はほとんど見られないのである。学校音楽を形成してきた多くの音楽教育者にとって、幼稚園と低学年の連続性は重要なトピックではなかったのである。

本稿では、従来の初等教育における音楽教育に対してインパクトを与える重要な要因に、19世紀後期に幼稚園教育に必要とされた歌があったのではないかという問いを出発点とし、19世紀後期から出版が始まる幼稚園用の歌の本を手がかりとして幼稚園音楽教育の発展を展望する。それを通じて幼稚園の歌と

学校音楽教育との間にいかなる影響関係があったのかを分析することを、本稿の目的とする。

1. 幼稚園教育運動の側の主張

上述のように幼稚園用の歌に着目するのは、幼稚園教育の先行研究と言うべき歴史書 Vandewalker の *The Kindergarten in American Education* 中の記述のためである。

> すでに述べたように[3]、幼稚園の歌の本は、幼稚園の影響を学校へと伝える際に重要な役割を果たした。…歌の本は子どもの発達における音楽の機能についての新しいコンセプトを示し、発達が保証されるに違いない方法についての新しい概念を示した。幼稚園教師は、この発達が音楽的感覚の育成だいであり、そのため、このことが子どもの理解力に適した良い音楽を聞くことを不可欠なものとする、と主張した。これが事実上子どもの歌を作り出し、教育の手段としての暗唱歌の使用をもたらした[4]。

このように Vandewalker は、初等学校の教育に幼稚園が重要であったこと、それが良い音楽を聞くことによる音楽的感覚の育成と不可分な問題であったことを指摘している。このような主張が妥当であるとすれば、中等教育段階から初等教育へと拡張されたアカデミックな音楽鑑賞教育とは別の、幼稚園から低学年段階へと拡張した音楽鑑賞教育があることになる。そして、それらは共に、音楽鑑賞運動の現れの一形態としてみなすことができる。Vandewalker によると、暗唱歌を用いた教育の影響は、暗唱歌が正当に評価されていない Loomis の音楽教科書の極端な形式主義に[5]影響を与えていくのであり、その影響力は、主として歌の本を通じて具現化されたと理解されている。

20 世紀初期の幼稚園教育関係者の立場からは、子どものための歌の本は当時の米国の音楽教育界に影響を与えた重要な要因としてみなされているのである。Vandewalker はそのような歌の本として、Hubberd の *Merry Songs and Games* を皮切りに、多くの幼稚園用の歌の本を示している。

Vandewalker の指摘は、幼稚園用の歌の本と音楽教科書のどちらの編纂にも携わった Smith[6] のような教育者が存在していることを考慮すると一定の説得力をもつ。Vandewalker の主張した幼稚園教育の影響が、初等学校に存在していたかは考察に値するものであるといえよう。Vandewalker は、幼稚園用の歌の本の最初のものとして、Hubbard の *Merry Songs and Games*（1881）を挙げ、Wiggin の *Kindergarten Chimes*（1885）、Smith の *Songs for Little Children*（1887）、Hailman の *Songs, Games, and Rhymes*（1887）、Emerson と Brown の *Stories in Song*（1890）、*Songs and Games for Little Ones*（1892）、Patty と Hill の *Song Stories for Kindergarten*（1893）、1896 年以降のものとして、さらに Jenks と Rust の *Song Echoes*、Neidlinger の *Songs for Child World*、Gaynor の *Songs for the Child World*、Poulsson の編纂した *Holiday Songs* を挙げている[7]。このほかに、幼稚園でのマーチ等の活動のための器楽曲、ゲームやダンスのための音楽の教材集が、Vandewalker によって紹介されている。

このように幼稚園教育の立場から着目された歌の本の増加とは、幼稚園における音楽にとって何を意味したのであろうか。以下では、それを明らかにしていくために、Vandewalker が年代順にあげた最初の 3 冊の歌の本である、Hubbard の *Merry Songs and Games*（1881）、Wiggin の *Kindergarten Chimes*（1885）、Smith の *Songs for Little Children*（1887）を取り上げる。それは、これらの 3 冊の歌の本には、言及された一連の歌の本が有するおおまかな共通点と相違点、そして強調点に関するもっとも基本的な性質がすでに表れていると考えられるためである。

2. Hubbard の *Merry Songs and Games*（1881）

ミズーリ州セントルイスの Eads 幼稚園のディレクター Hubbard の *Merry Songs and Games*（1881）は、Vandewalker が考えるように最初の幼稚園用の歌の本と言えるとは考えにくい。実際 Hubberd は、様々な歌の出典を挙げて感謝の意を表明している。また、Hubbard は指遊びの歌は全て Lee & Shepard 社の Mother Play[8] から採録したと述べている。その他、Steiger、Hurwaite らに謝意が表明されており、とりわけロンドンで出版されたものではあったが、Hurwaite の著作に関しては「幼稚園の音楽に関する歌の選集」[9] であると認識しており[10]、幼稚園用の歌の本、と限定しても、フレーベルの後に別の著作が存在していたことは確実に認識されているのである。また、ナーサリーライムに関しては、より古くから楽譜付き

の出版物が存在している。アメリカに限定して歌の本に関して考察したとしても、単に最初の幼児用の歌曲集という意味とは全く違ったものとして、Vandewalker が幼稚園用の歌の本を取り扱っていたことが予見される。

この著作における著者 Hubbard 自身の記述は非常に短い。*Merry Songs and Games* の立場は、結果として同書の序及び序文を執筆した Blow によって示される。Blow は、その序文の冒頭で、幼稚園が「子どもの愛着や共感を通じて彼の思考に影響を与えることを狙いとしており、幼稚園は子どもの活動に訴えることによって、それらを刺激する」[11] と述べている。子どもの活動が、幼稚園が目的とするものを達成する根底にあるのであり、活動は愛着や共感に働きかけることで、子どもは「自己を知り、自分に関係ある全領域を観察し、意識的に把握する」[12] ようになるのである。このようなことを可能にするのは、組織された経験の連続であると考えられている。そして、「音楽の影響は教育の中心であり開始点であるべき」[13] とするゲーテに着想を得て、幼稚園の指導法は歌とゲームの周りにある、と指摘する。歌とゲームは、言葉、旋律、動きが同じ概念を表していることを特徴とするものである、と Blow は考えており、それぞれが子どもの「思考、感覚、活動」に訴えかける[14]として、歌とゲームはこれら 3 方面への教育的意義をもつものとして理解されている。Blow は、ゲームには、体育的要素を強調する純粋な動きのゲーム、感覚訓練のためのゲーム、好奇心を刺激することで思考を刺激するゲーム、そして象徴ゲームがある[15]と考えている。Blow は主として象徴遊びに関して言及しており、フレーベルの教育思想に照らして、歌やゲームを重要なものとみなしていたことが明かされている。

子どもの遊びに生活の多様な側面を反映させれば、彼の思考はその意味を把握し始めるであろう、という部分が、Blow が歌とゲームに求めた中心的意義であろう。このような考えが真実であるとすれば、「彼の遊びにより多様に生活を反映させるなら、子どもの呼び覚まされた興味や関心の範囲はより広がるであろう」[16] と、Blow は主張するのである。Blow にとって同書は、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』の扱う歌の範囲を拡大し、フレーベルの理念のより十全な実現を可能にするものなのである。フレーベルの教育理念を体現するものであるがゆえに、幼稚園の歴史上『母の歌と愛撫の歌』が広く使われておらず[17]、ヨーロッパ・アメリカのどちらでもそれに含まれる比較的少数のゲームだけが行われたことは重要であると、Blow は考えている。

Hubbard の立場はわずかな言葉から知ることしかできないが、「あるゲームから別のゲームへと徐々に導くために、ディレクターによって、これらのゲームと関連した物語の用意に多大な注意がなされるべきである」[18] という言葉からは、ゲームを通じて暗示的に生活の関連を示そうという意図が読み取れる。従って、Hubbard 自身も Blow と大差なく、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』の意図を継承しようとする立場であると考えられる。このような立場は、Blow たちによるフレーベルの教育思想の研究の成果であるだろう。Blow は「およそ 3 年前、私たちはセントルイスで *Mother Play and Nursery Songs* の非常に慎重な学習を始めた。それぞれの歌を個別に取り上げ、それに含まれるフレーベルの真意を読み取ることをねらいとした」[19] と述べている。ここで 3 年前と考えられる 1878 年は Dwight らによって、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』の英語の訳本が初めて出版された年であり、その題名も同一であるので、ここでは Dwight らの訳本を通じて、フレーベルの教育思想を摂取したと考えて間違いないであろう。Blow は *Mother Play and Nursery Songs* の歌を実践に上手く適用するためには音楽を修正したり完全に替えたりする必要があること、身振りによる解釈のより完全な指導法が発見され体系化されねばならないことが明らかになった[20]と、新しい歌の本の必要性に言及している。

Blow のフレーベル理解は、序に詳述されている。まず、Blow は、心に留めておくべきこととして、思考の発達の過程を「第 1 に、共感と感情は思考の原初の形態である。第 2 に、感情から思考への移行は意志の活動を通じて達成され、思考それ自体はあいまいな観念で始まり、…具体的で有機的で完全になる」[21]、と述べている。その思考には、「我々が何であるかについてではなく、われわれ自身が既にぼんやりと知っているものは何のためにあるのかについての鏡」[22] が必要とされるのであった。Blow は、ぼんやりと知っている何かを示すために、フレーベルが「基本的な真実を幼児の精神に予示しようとするなら、私たちはそれらを象徴の形式で提示し、象徴的表現としてそれらを子どもに可能にする」[23] ための工夫が必要であると気づいたと考えている。そして Blow は、フレーベルの「主要な目的は、子どもが多くのものの背後にある 1 つを捜すように、そして見えるものの下部にある見えないものを感知するように導

くことである」[24] と理解している。このような原則が、幼稚園の歌にも反映されている。Blow によると、「全ての幼稚園の歌の際立った特徴は、身振りに強調がおかれることで」[25] あり、「子どもが歌うと同時に、彼は動作を行い、それは旋律や歌詞の意味を示す」[26] ことであった。身振りは幼児が歌の意味を理解するための補助手段として、不可欠なものなのである。このように、*Merry Songs and Games* を貫くのは、フレーベル思想の解釈とその十全な実現であり、歌は最も有力な教育の手段として理解されているのである。

表 1 は Hubbard の教材集に示された曲の分類とそれぞれの項目に配分された曲数である。

表 1　Hubbard による曲の分類と曲数

Hubbard による曲の分類	曲数
席で歌われるべき歌[27]	7
商売人の歌	8
象徴歌	8
花の歌	6
鳥の歌	8
山彦歌	4
冬の歌	5
クリスマスの歌	4
ボールの歌	7
立方体の歌[28]	6
輪になるための歌	5
感覚のためのゲームの歌	5
象徴ゲームの歌	30
総計	103

（Hubbard, C. B., *Merry Songs and Games*, Balmer & Weber, 1881, p.12 より筆者作成。）

Hubbard 自身は *Merry Songs and Games* を 2 部構成にしており、「輪になるための歌」以降が第 2 部である。第 1 部の内容が指遊びを含めた歌であれば、第 2 部はより身体的な活動を中心とした遊び歌であると考えられる。遊び方が解説されているものは第 1 部の「席で歌われるべき歌」のうち 5 曲であり、主に指遊びである。その後は、歌に含まれる歌詞内容を踏まえて遊ぶことになる。第 1 部の内容は、様々な生活と関連したテーマであるが、花や鳥といったいくつかの象徴的主題、あるいは四季ではなく冬だけが提示されていることなど、これが単なる生活の諸場面ではなく、特定の教育的配慮に基づくものであることを示している。また、ボールや立方体など、フレーベルの恩物のための歌があることも特徴的である。第 2 部は、ゲームの歌であり、とりわけ様々な概念の獲得を目指す象徴ゲームが重視されていることは、曲数から見ても明らかである。

以上のように、*Merry Songs and Games* はフレーベルの教育思想を尊重しようとするものであり、その意図も先述したように歌を通じた教育であった。しかし、*Merry Songs and Games* には、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』に見られるような歌の背後にある教育思想を示したモットーは存在していない。もし、それぞれの具体を貫く一貫したものがあるということを自明視し、その意図を省略したものであるとしても、教育的意図の明示されないカテゴリー分けされた歌曲集が、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』と同様の影響を有するとは考えにくい。フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』からして、その歌詞自体は必ずしも理念的なものが中心ではなく、そのような点で、この歌曲集は教材だけを見れば単に子ども用のゲームのための歌曲集とも見なせる構成となっている。一方で、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』の音域や曲を変更する必要に言及はしているとはいえ、音楽的側面に関する特段の配慮は明示的には要求されない。子どもの歌は、あくまでも子どもの思考の発達の最良の手段であるがゆえに重要なのである。理念的なフレーベルの受容と、実用的な歌曲集という二重性が、*Merry Songs and Games* を特徴づけている。

3. Wigginの *Kindergarten Chimes*（1885）

カリフォルニア州サンフランシスコのWigginの *Kindergarten Chimes*（1885）は、Wigginが世話をしている幼稚園の子どもたちの特別な必要性に合うように作曲し、編曲した歌曲集であるとされている。

Wigginは、歌詞と曲に関して注意を払ったことに言及している。歌詞については、「まずい韻や不完全な拍やたどたどしいリズムに不正確なアクセントといった、子どものために書かれた非常に多くの歌を台無しにする」[29] ものを避けたとしている。具体的には、「子音が簡単な場所に来るようにし、高音の母音を、意識的に取り組まなくても澄んで共鳴する音に」[30] したと述べている。一方で、曲に関しては、難しい音程と複雑な拍子を避けた[31]、としている。また、「訓練された音楽家ではない普通の幼稚園教師の能力の範囲内にしながらも、完全な「一本指用の編曲」は避けて」[32] 伴奏をつけたと述べている。また、あまりにも高すぎたり低すぎたりする曲は、原調から転調した、ことに触れている。このように、Wigginは音楽表現に対する配慮を強調しているのである。

また、Wigginは表2に示したように幼稚園教師のための15の忠告を行っている。

表2　Wigginの提案した15の忠告の概要

1	組織された遊びは幼稚園に必要で不可欠な部分である。
2	幼稚園教師は可能な限り子どもたちを通じて遊びに導くべきである。
3	フレーベルは、思考や行為の点で子どもたちを移り気で表層的にするのを恐れて、同じ時間に多くの違うゲームに次々と移らないように警告した。
4	適切な歌とゲームの選択と創作は、幼稚園教師にとって最も注意を要し厳しい仕事である。
5	遊びをより自然で自発的にするために、外部の人工的な媒体は少ないほどよい。
6	遊び仲間を犠牲にしてゲームでより活動的な役割を演じたいという望みから子どもたちを遠ざけるべきである。
7	選ばれたゲームの中で、特定の出来事、季節、子どもの発達に関する言及をする。
8	最初の数週間は、可能な限り簡単なゲームで遊ぶ。
9	子どもたちにゲームに関する考えを述べるように勧める。
10	幼稚園教師の場所は、円の中心か、ピアノの場所、あるいは最も幼い子どもたちの周りである。
11	歌詞、身振り、歌のいずれからゲームを提示するかは個々の場合によって違う。
12	幼稚園教師に自分の声の使い方に注意させる。
13	子どもの経験と全く関係のない導入、形式的に教えすぎること、機械的な遊びといった誤りの存在。
14	歌とゲームの分類：象徴遊び、感覚発達のための遊び、説明的な歌や恩物の歌、社会・生活と関連した歌。
15	歌とゲームの象徴的表現の理解の精神とインスピレーションを得るために、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』を学ぶ必要性[34]。

（Wiggin, K. D., *Kindergarten Chimes*, Oliver Ditson Co., 1885, pp.VII-Xより筆者要約。）

これらの忠告は、基本的に遊びの内容と、音楽に関する内容に別れている。フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』を学ぶ必要性をはじめとして、Wigginの忠告は決してフレーベルの教育思想を軽視するものではないが、これらの指摘は熟達した幼稚園教師のニーズに応えるものとしてよりも、むしろ経験の少なく専門的な理解も十分ではない幼稚園教師のニーズに応える内容といえよう。すなわち *Kindergarten Chimes* は、幼稚園で歌とゲームを展開するためのマニュアル的性質なのである。このような実用性は、付録としてつけられた5ページにわたる歌やゲームの簡潔な説明[35]にも表れている。その内容は、教育的な意図や遊びの精神性を表すというよりも具体的な行為の指示であった。遊びに関してはテーマの統一を図ることが意図されている[36]。しかし、これが物事の背後にある存在に気づくためなのか、それとも物事の表面的な連続性を再現するものなのか、その意図を明らかにすることは困難である。

音楽的側面に関する忠告は4、12の2つと数は少ないが、分量的には忠告のうちおよそ4分の1を占めている。Wigginによると、「ピッチが調から高すぎも低すぎもしないような、子どもたちの歌が大きすぎもしない、あるいは拍子が遅すぎないような、はたまた子どもたちが歌っている歌詞が理解できるよう

な」[37] 幼稚園はほとんどないのであった。とりわけ、「誰もが知っているように、叫ぶ習慣は、最も声を傷めるものであり、旋律の美しい、すなわち共鳴する歌唱の可能性を完全に妨げ、それさえなければ澄んで純化する影響のあるものを、野蛮で騒々しい体育の訓練へと変えてしまう」[38] と、叫び声に注意を向けている。それどころか、Wiggin は Tomlins の The Training of Children's Voices という論文を有用であると述べ、正しい指導法を始めるのに早すぎることはない[39]、とするのである。早期に指導を開始するのは、柔らかさ、美しさ、表現性、そして趣味（taste）のため[40]でった。通常は教師が声の育成（voice-culture）に慣れていないと考える Wiggin の視点は、幼稚園教師の、というよりも音楽教育者の視点に近く、実際に音楽教育者たちの影響を受けたものであり、趣味への言及など鑑賞の萌芽的なものを、音楽教育者の側から摂取しているのである。

表 3 は Wiggin による曲の分類と曲数である。

表 3　Wiggin による曲の分類と曲数

Wiggin による曲の分類	曲数
輪になるための歌	7
祈祷文と賛歌	12
始まりと終わりの歌	9
恩物の歌	16
行進の歌	6
クリスマスの歌	7
その他	12
ゲームの歌	38
総計	107

（Wiggin, K. D., *Kindergarten Chimes*, Oliver Ditson Co., 1885, pp.123-124 より筆者作成。）

圧倒的な分量であるのは、Wiggin の場合も「ゲームの歌」である。また、日々の行事に関連する「祈祷文と賛歌」、「始まりと終りの歌」、「行進の歌」など、幼稚園で実用的な歌も多い。ボールや立方体を中心とした恩物の歌は、やはり存在している。それでも、遊びや歌に関する基本的な忠告を必要とし、『母の歌と愛撫の歌』の学習を勧められるような教師を対象にしたことを考えると、フレーベルの象徴遊びに関する言及の少なさは、フレーベルの教育思想の強調の弱さとも理解可能なものであった。助言の中心は、ゲームのそして歌の実用的な指導に関するものであり、幼稚園の拡大期に必要とされたであろう実用性に対する要求が優先されたものであるといえよう。

4. Smith の *Songs for Little Children*（1887）

Smith の *Songs for Little Children*（1887）は、イリノイ州シカゴの幼稚園を主要な対象として書かれている。しかし、その「幼稚園と初等学校のための歌とゲームの選集」という副題が示すように、幼稚園ばかりでなく、公立学校での使用も意図したものとなっている。

Songs for Little Children には Smith 自身の文章はなく、代わって幼稚園シカゴフレーベル協会の責任者でクック社師範学校の幼稚園部門長 Putnam の序文が、同書の理念を説明している。序文は、恩物の効用や動きの遊びに言及している[41]。しかし、Putnam の強調点は明らかに音楽にある。Putnam は、音楽がただ情動だけに働きかけるという見解にフレーベルを引いて反論し、音楽によって、子どもが明晰な思考、正しい感情、高貴な行為へと導かれる[42]、と主張する。そして、良い音楽の知識と趣味をもつものとして、教師たちの音楽の選択を助けるものであるとして、同書の役割を説明している。

Putnam は、旋律や和声の最良の部分が除かれてしまう安易な編曲による単純化を批判する。もし現状では子どもたちにとって音楽が難しすぎるなら、後のために残しておくことができる、というのが Putnam の見解である。また、たとえ子どもには意識されないにしても、良い伴奏が要求されている。それは、伴奏を通じて、耳が良く、あるいは悪く慣らされると考えるためである。リズムに合わない歌詞や、古過ぎる、あるいは子どもに合わない語彙も、耳が虚しく音だけを捉え、口先で繰り返すけれども思考を刺激し

ないので[43]、避けられるべきものであった。

また、歌われるものだけでなく、その方法にも関心が向けられている。歌い方については、まっすぐにくつろいで立った姿勢が不可欠であり、あごと喉の筋肉は緩めておく、と、説明されている。歌い方が重要視され、鳥や蝶の飛翔、鍛冶屋や刈り手の動きなどを表すことは発声器官の正しい使用と両立しないので、そのような行為は遊びの輪で静かにくつろいで立っている仲間に委ねられるべきであると主張されるのである。また、Tomlins による良い音質で歌うために必要な 5 つの条件、即ち 1）柔らかい声、2）高い声、3）笑顔、4）喉の拡張、5）長くゆったりした息、が提示されている。このように、関心は完全に歌唱教授にある。「これらの訓練のために、どのような幼稚園の専門家が子どもたちの遊びを奪うだろうか」[44]、と反問しつつも、Putnam は、これらの必要用件を無意識に子どもたちに訓練させる場所として、幼稚園以上に有利な場所はない、と指摘するのである。音程に関しては、跳躍進行が否定され、順次進行と和声的な跳躍だけが許容されている。Putnam は、Smith による音楽の提示によって、「非常に幼い子どもに良い音楽だけを与えることの完全な実行可能性」[45] が示されたとみなしているのであり、幼稚園の歌を「適切な時が来たときに音楽の美しい神秘を大いに愛しより良く理解する」[46] ための準備となる、と考えているのである。このような主張は、*Songs for Little Children* が、歌唱を通じた幼児期からの音楽鑑賞教育[47] を目指していることをはっきりと示している。

表 4 は、Smith による曲の分類と曲数である。

表 4　Smith による曲の分類と曲数

Smith による曲の分類	曲数
朝の歌	7
四季の歌	21
恩物の歌	13
指遊びの歌	12
行進の歌	3
サークルゲームの歌	5
職業の歌	4
その他	17
終りの歌	3
総計	85

（Smith, E., *Songs for Little Children*, Milton Bradlay Co., 1887., Index より作筆者成。）

Smith の曲の配列は、幼稚園の生活という形式に一致している。「朝の歌」で始まり、「終りの歌」で終わるのであり、その間に、恩物遊びや指遊び、行進、ゲーム、季節や生活に関する歌が配されているのである。「その他」には、花や天候、子守歌、マザーグースまで種々雑多な歌が並んでいる[48]。フレーベルの象徴主義が前面に出るわけではなく、象徴的表現と生活に即した歌の区別はつかないものの、曲の分類やその項目は、音楽教育を重視したこの歌の本においてもこれまでの幼稚園用の歌の本と大きく異なってはいない。

5. 初期の幼稚園用の歌の本の示す幼児音楽教育の様相

これまで幼稚園用の歌の本を検討してきたが、フレーベル以降、思考の発達の手段として音楽に重要な役割が与えられてきたことを除いて、暗唱歌を用いた音楽教授といった幼児音楽教育に独自な方向性が幼稚園の歌の本によってもたらされたと考えることは困難であろう。暗唱歌を用いていることは間違いないものの、その意味合いはあくまでも最も有用な子どもへの教育手段としてなのであり、Vandewalker が指摘したように幼稚園教育思想の側から幼児音楽教育が発展したと考えることはできない。

事実は、むしろ逆であろう。Tomlins を初期の 3 つの著作のうち 2 つまでが引用していたように、そしてフレーベルの教育思想をより完全にするという目的とは考えがたい音楽教育への関心が述べられていたことに表れているように、幼稚園で歌が用いられていたことは、歌の本の形で新たな教材を供給し、幼児

期からの歌の教育という発想をもたらしたのである。すなわち、歌の使用こそが幼稚園に音楽教育というフレーベルの教育思想とは異なる観点をもたらしたのである。それは第1に子どもの声への配慮として示されていた。また子どもに適し、かつ良い旋律や歌詞をもつ曲を選び歌うことで、将来、音楽を愛し、理解するようになる、という未だ明確に言語化されて意識されていない、音楽鑑賞として20世紀に一般的となる考え方の原型も、子どもの声への関心と共に幼稚園教育に入り込んだのである。

初期の歌の本は数が少なく、必ずしも年代順であることが歴史的順序性を現しているとはいえない。しかし、少なくとも歌の本として一体的に認識されていた本稿で取り扱った3冊の歌の本には、フレーベルの教育思想の具現化、幼稚園教師用の実用的な歌と遊びの教材集の提供、音楽教育への関心、という重なり合いつつも異なる3つの方向性を確認することができた。そして、音楽教育への関心がフレーベルの教育思想とは別の、学校音楽教育という出自をもつことも明らかにできたであろう。歌の使用という発想自体はフレーベルの思想の影響を強く受けながらも、幼稚園用の歌の本は、園生活での歌の使用という実用的関心と、音楽教育への関心を満たすものとして機能していると考えられる。

当時の米国の音楽教育への関心を取り込んで、結果として幼稚園教育における歌の本は形式的な音楽教授が根強く残っていた当時の初等音楽教育よりも先進的である、とVandewalkerに思わせるまでに発展することになるのではなかろうか。音楽教育への関心を学校教育から取り込んで、幼稚園における音楽教育がどのように発展していくのかについては、今後検討していく必要があろう。

注及び文献

1) 荒巻治美『アメリカ音楽科教育成立史研究』風間書房、2001、p. 2。荒巻は、音楽科教育の成立という問題意識が見られないのは、音楽教育の通史研究者たち「の関心が教科外の音楽教育も視野に入れた学校音楽（School Music）に」あることを挙げている。このような問題設定は、荒巻のいうように教科という問題意識が欠落する一方で、学校音楽の射程外の領域を生む原因ともなる。
2) Mark, M. L. and Gray, C. L., *A History of American Music Education*, Rowman & Littlefield Education, 2007, p.221.
3) Vandewalkerはこの言及以前に、第9章で幼稚園の歌の本を紹介し、その重要性を指摘している。
4) Vandewalker, N. C., *The Kindergarten in American Education*, The Macmillan Co., 1908 (Reprint: Kessinger Publishing, 2007), p.221.
5) Ibid., p.213.
6) Smithは音楽教科書も出版しているが、Smithのような著者はむしろ稀である。
7) Ibid., pp.175-176.
8) これは1878年の版権のフレーベルの『母の歌と愛撫の歌』の英訳書である。
9) Hubbard, C. B., *Merry Songs and Games*, Balmer & Weber, 1881, p.11.
10) World Catなどを参照したが、Hurwaiteの著作がどのようなものであるのかに関する情報は得られなかった。
11) Ibid., p.10.
12) Ibid.
13) Ibid.
14) Ibid.
15) Ibid.
16) Ibid.
17) 英語版の初の訳本は1878年の *Mother Play and Nursery Songs* であった。
18) Ibid., p.11.
19) Ibid., p.10.
20) Ibid.
21) Ibid., p.3.
22) Ibid.
23) Ibid., p.4.

24) Ibid., p.5.
25) Ibid., p.6.
26) Ibid.
27) 指遊び歌が中心で、あいさつの歌も含まれている。
28) ボールや円柱も存在しており、第2恩物の歌である。
29) Wiggin, K. D., *Kindergarten Chimes*, Oliver Ditson Co., 1885, p.V.
30) Ibid.
31) Ibid.
32) Ibid.
33) Ibid.
34) ここでは良訳としてLordの翻訳が推奨されている。
35) Ibid., pp.118-122.
36) 7番目の忠告などが該当する。
37) Ibid., p.XI.
38) Ibid.
39) Ibid.
40) Ibid., p.X.
41) Smith, E., *Songs for Little Children*, Milton Bradlay Co., 1887, Preface.
42) Ibid.
43) Ibid.
44) Ibid.
45) Ibid.
46) Ibid.
47) 音楽鑑賞教育は、良い音楽を愛し、理解するためのものとして20世紀初期にしばしば言及される。
48) Ibid., Index.

荒巻治美『アメリカ音楽科教育成立史研究』風間書房、2001。
Birge, E. B., *History of Public School Music in the United States*, MENC, 1966.
Dunham, R., L., "Music Appreciation in the Public Schools of the United States, 1897-1930", Ph. D. dissertation, University of Michigan, 1961.
Fröbel, F., Lord, H. F., Lord, E., *Mother's Songs, Games and Stories*, William Rice, 1885.
Froebel, F., *Mother-Play, and Nursery Songs*, Lee & Shepard, Publishers, 1893.
Himrod, G. P., "The Music Appreciation Movement in the United States, 1930-1960", D. M. A. dissertation, Boston University, 1989.
Hubbard, C. B., *Merry Songs and Games*, Balmer & Weber, 1881.
Jenks, H. S. and Rust, M., *Song Echoes from Child Land,* Oliver Ditson Co., 1896.
Keene, J. A., *A History of Music Education in the United States*, University Press of New England, 1982.
Mark, M. L. and Gray, C. L., *A History of American Music Education*, Rowman & Littlefield Education, 2007.
Neidlinger, W. H., *Small Songs for Small Singers*, G. Schirmer, 1896.
Poulsson, E., *Holiday Songs and Every Day Songs and Games*, Milton Bradley Co., 1914 (Reprint: Kessinger Publishing, 2005).
Riley, A. C. D. and Gaynor, J. L., *Songs of the Child World No. 1*, The John Church Co., 1897.
Riley, A. C. D. and Gaynor, J. L., *Songs of the Child World No. 2*, The John Church Co., 1904.
Riley, A. C. D. and Gaynor, J. L., *Songs of the Child World No. 3*, The John Church Co., 1915.
Smith, E., *Songs for Little Children*, Milton Bradlay Co., 1887.
Stoddard, E. M., "Frances Elliott Clark: Her Life and Contributions to Music Education", Ph. D. dissertation,

Brigham Young University, 1968.
Tellstrom, A. T., *Music in American Education,* Holt, Rinehart and Winston, 1971.
Vandewalker, N. C., *The Kindergarten in American Education,* The Macmillan Co., 1908 (Reprint: Kessinger Publishing, 2007).
バンデウォーカー，ニーナ　C.／中谷彪監訳『アメリカ幼稚園発達史』教育開発研究所、1987。
Walker, G. and Jenks, H. S., *Songs and Games for Little Ones*, Oliver Ditson Co., 1887.
Wiggin, K. D., *Kindergarten Chimes,* Oliver Ditson Co., 1885.